

英語の語源について II

元 木 美 男

On English word origin II

Yoshio MOTOKI

Abstract

From the ninth century on the Normans invaded the east coast of England and the northwestern coast of the Frankish kingdom. King Alfred defeated the Danish army at Edington. In 878 Guthrum, the Danish leader accepted terms, known as the Treaty of Wedmore, which created the Danelaw. Rollo, the leader of Norman invaders underwent a defeat beneath the walls of Chartres. In 911 he made peace with Charles the Simple, king of the West Franks at Sainte-Clair-sur-Epte and was granted the land called Normandy.

The Scandinavian element in English was due to the Norman invasions of England. And the introduction of French words into English was also due to men of the same race as those who brought Scandinavian words to England. The Normans adopted the French language and spoke a dialect known as Norman French. After the Norman Conquest this dialect was, for 300 years, the official language of the court, of justice, and of politics. Some curious French loan-words are taken up and their etymological meanings and changes of meaning are examined in this paper.

今回は英語の借用語彙や語源一般について論じ、また古代から現代までに至る借用語彙が、英語の語彙や表現をどれほど豊かにしてきたかを述べた。今回は、ノルマン・フランス語 (Norman French) を含めフランス語からの借用語に絞って、気になるいくつかの語を取り上げ、その語源について論じてみたい。

ノルマン・フランス語と言うのは、ノルマンディー地方に定住したバイキングの末裔達の話したフランス語のことである。911年バイキングの首領ロロ (Rollo) に率いられたノルマン人達に、西フランク国王シャルル単純王より侵掠の中止とキリスト教への改宗を条件に、ルーアン (Rouen) を中心としたセーヌ河下流地域が割譲せられ、これが発展してノルマンディー公領となった。その公領で話された言葉であった。そして更にノルマンディー公ウィリアム (William) に率いられたノルマン人が英国に攻め入って、ハロルド王率いる英国軍に打ち勝ってノルマン王朝を開いた。その王朝の下で用いられた言葉を本国のノルマン・フランス語と区別して、一般にアングロ・フレンチ (Anglo-French) と呼んでいる。本来、同質のものである。ノルマン人、つまりバイキングの話したフランス語である。

英語は、元来ゲルマン語であるにもかかわらず、音声的にはフランス語 (最初にノルマン・フランス語、次いで中央フランス語 (Central French)) の影響を受けて、次第にその生硬さを減じ、ドイツ語とは異なる今日のような甘からず、硬からず、柔らかいラテン的な響きを持つ言語となった。これはフランス語、延いてはラテン語のお陰である。またロマンス語彙の借用によって、英語がどれほど豊かな表現力を獲得したかは、開けた書物のどのページからでもロマンス語彙を拾い出してみれば分かる。その語彙の豊富さに驚かされるのである。

以下、フランス語からの借用語の語源を辿ってみたい。

council と counsel について

council はフランス語 concile から1126年以前に借用されている。語源はラテン語 concilium である。原義は「呼び集める」(con+calo)、「召集する」である。そこから、「統合」、「会合」、「会議」となった。

counsel の方は、1200年以前にフランス語 conseil からの借用である。これはラテン語 consilium に遡る。原義は、少々疑問の余地も残るが、「すわる」(con+sedeo)、「すわってよく考える」である。従って、意味は「沈思」、「熟慮」(deliberation) であり、また熟慮の結果として生まれてくる「決意」、「計画」であり、他人に対して与える「助言」や「忠告」となる。更には、助言や勧告を与えるた

めの人集まり(集団)「会議・協議会」となった。ここに council と counsel が意義上同一のものとなってしまい、綴字の点からも OED(The Oxford English Dictionary)の Council の項で指摘されている通り、よく似ているために大きな混乱を生じてしまう。OED の説明を引用すれば、

In English, the two words were, from the beginning, completely confused: *conseil* was frequently spelt *conceil*; *concile* was spelt *consile* and *conceil*; and the two words were treated as one, under a variety of forms, of which *counseil*, later *counsel*, was the central type. In the 16th c. differentiation again began: *council*, later *council*, was established for the ecclesiastical *concilium*, F. *concile*; and this spelling has been extended to all cases in which the word means a deliberative assembly or advisory body (where L. has *consilium*, Fr. *conseil*), leaving *counsel* to the action of counselling and kindred senses. The practical distinction thus established between *council* and *counsel* does not correspond to Latin or French usage.

中世英語においては、フランス語の *conseil* はしばしば *conceil* と綴られ、*concile* の方は *consile*、または *conceil* と綴られた。このため、両語は同一のものとなってしまい、意義の混同も生じた。16世紀には両語の区別の試みが始まった。そして *council* の方は教会会議や審議会、協議会、評議会の意味で使われ、*counsel* の方は相談、助言、忠告と言った行為そのものに限られることになった。こうして出来上がった両語の区別は、ラテン語やフランス語の用法とは対応しないものとなってしまったと言うのである。更に OED の *Counsel* の項に説明があるように、フランス語には様々な意味が残されているが、英語では審議・諮問機関の意味は、ラテン語 *concilium* との混同によって今では *council* と書かれている。

spy—espy, state—estate, spouse—espouse, squire—esquire, spirit—esprit, specially—especially など一連の語における語頭の e-の問題

語頭の e-は15世紀以前にフランス語に採り入れられたラテン語で語頭の sc-, sp-, st-の二重子音に e-を加えるのは古代フランス語 (Old French) における音便上の習慣であった (寺澤芳雄編「英語語源辞典」*especial* の項)。

これら一連の語は、全て語源を等しくするいわゆる二重語 (doublet) であ

る。e-の付加されていないラテン語形の方が、意味は原義的なようであるが、両者の意義の区分、打ち分け方の明確な特徴は掴みがたい。ただ、especiallyなどは、speciallyと比べて、e-の付加によって幾分言葉に重み加わるように思える。

divers—diverse, human—humane, urban—urbane における語末（尾）の-eの問題

それぞれフランス語 divers, -erse; humain, -aine; urbain, -aine からの借用である。ラテン語は diversus (それた、異なった)、humanus (人間の、人情のある)、urbanus (都市の、都会風の) である。これらの対になっている語は、それぞれフランス語の男性形と女性形である。語末に-eの付くのが女性形である。アクセントは男性形と女性形とで前後に打ち替えている。全体として、男性形の方が意味が原義的であり、意味の幅も広い。それに対して女性形の方は、意味が派生的であり、特殊化されている。これは、先に論じた moral—morale の場合も同様であった。ただ divers—diverse の場合は男性形の方は廃れてしまい、女性形の方がもっぱら用いられて、意味の担い方もこちらの方が大きい。全てが同じようにいかないのが言葉の姿である。

名詞の場合も男性形—女性形とはいかぬが、aid—aide、corps—corpse、suit—suite、troop—troupe といった対語がある。やはり語末に-eの付いた名詞の方が、意味の広がりも狭く、その使用が限定されている。aide の場合などは、close aide (側近) といった用法くらいのものである。また troupe の綴りはフランス語そのままである。

cry、easy、safe について

cry は古代フランス語 crier、easy はアングロ・フレンチ (Anglo-French) aisé、safe は古代フランス語 sauf から中世に借用されている。普通の人には、これらの語があまりにも使い心地がよいものだから、英語本来の言葉であると勘違いしているのではないかと思う。それほどよく使い慣れた言葉である。これらの借用語は、例えば ask や give のようにゲルマン語起源の語と同じように感じられるのではあるまいか。それは何にも増してよく使い込まれてきたこと、また音節が短いこと、アクセントが語頭に落ちること—つまり本来語らしく見えることなどが、その理由である。このような例から、ノルマン・コンクエスト以降英語とフランス語がどれほどよく溶け合い、親しいものになっていったかが分かる。

repair と defect について

repair の意味は、一つは「直す」もう一つは「行く」である。それぞれに語源が違うのである。「直す」、「修繕する」の意味を持つ repair はフランス語 réparer からの借用である。ラテン語は re-paro 「再び用意する」である。

「行く」を意味する repair の方は、フランス語 repaire から借用で、ラテン語は repatrio 「国 (patria) に帰る」である。そこから単に「帰る」、「行く」となった。repatriate 「(移住民・捕虜・亡命者などを) 本国に帰らせる」とは二重語である。ラテン語から直接借用の方が、フランス語経由よりも単語の形の崩れが少ないのである。

defect の語源はラテン語 deficio の完了分詞 defectus である。deficio の原義は「(出来上がったものが) 壊れる、崩れる、欠ける」であり、また「(元のところから) 抜ける、離れる」である。この de- は分離を表わす。ラテン語には、更に、月が欠けることや食となる意味もある。因にフランス語の défaire は、元の意味をよく留めている。これで英語の defect の意味は推量できるはずである。一つは「欠ける」、「損なう」であり、もう一つは「離反する」、「亡命する」である。ところで「亡命」とは戸籍を亡くすことを言うのである(「命」は名籍の意である)。OED からの引用文を掲げると、

1. To fail, fall short, become deficient or wanting; to fall off *from* (a standard, etc.). *Obs.*

1586 J. HOOKER *Girald. Irel. in Holinshed* II. 143/2 After he perceived that nature began to faile and defect, he yeelded himselfe to die.

1598 BARCKLEY *Felic. Man* iv. (1603)315 The vertue and goodnesse of men seemeth to defect from that of former ages.

1646 SIR T. BROWNE *Pseud. Ep.* I, V, 18 Yet have the inquiries of most defected by the way.

1652 GAULE *Magastrom.* 295 The Moon suddenly defected in an ecclipse. a 1677 BARROW *Serm.* Wks. 1716 III. 16 Not.. to defect from the right.. course thereto.

2. To fall away *from* (a person, party, or cause); to become a rebel or deserter. Now *Obs.* or *rare.*

1596 DALRYMPLE tr. *Leslie's Hist. Scot.* iv. liii, 241 Thay had defected frome the Christiane Religioune.

1646 Buck *Rich*, III, I. 15 The Duke was now secretly in his heart defected from the King, and become male-content.

1652 GAULE *Magastrom.* 340 He defected, and

fled to the contrary part. 1860 RUSSELL *Diary India* I. xviii. 280
The native troops and gunners defected.

更に OED Supplement から引用すると、

defect, *v.* 2. Delete 'Now *Obs.* or *rare*' and add: *spec.* to desert to a Communist country from a non-Communist country, or vice versa.

1955 *Times* 10 May 11/2 There must be many soldiers in the satellite armies who commit ideological sin in thought, but it is difficult to see how they could defect in action. *Ibid.* 27 Aug. 6/1 Dr. John.. defected to east Berlin last year. 1959 *Ibid.* 28 May 15/5 A plot by a member of Parliament and a lobby correspondent to persuade a top Russian scientist to 'defect'. 1960 *Guardian* 16 Sept. 13/2 One of the two code clerks who defected to Russia.

動詞(1)の意味は廃義となっており、名詞 defect 「欠点」、「欠陥」として残り、(2)の意味は一旦廃れてしまった後で復活している。興味深いことである。名詞形は defection 「離反」、「亡命」である。

defence と defense について

-ce、-se の問題である。まず OED の説明を掲げたい。

Defence, defense (dɪfɛns), *sb.* Forms: 3-6 *defens*, 3- *defence*, *defense*; (5 *diffens*, *-ense*, *-ence*, *difence*, 5-6 *deffence*, 6 *deffens*). [Two forms: ME. *defens*, a. OF. *defens* (*deffans*, *deffenz*, *desfens*, *-fans*, etc.), Ph. de Thaun 1119, ad. L. *dēfensum* thing forbidden, defended, etc., sb. use of pa. pple. of *dēfendēre* (see DEFEND); also ME. *defense*, a. OF. *defense* defence, prohibition, ad. L. *dēfensa* (Tertullian = *defensio*), f. pa. pple. *dēfensus* analogous to sbs. in *-āta*, *-ade*, *-ée*. In Eng. where *e* became early mute, and grammatical gender was lost, the two forms naturally ran together; app. the spelling *defence* comes from the *defens* form; cf. *hennes*, *hens*, *hence*; *penis*, *pens*, *pence*; *ones*, *ons*, *once*; *sithens*, *since*; *Duns*, *dunce*. The spelling *defense* is that now usual in the United States.

綴り方は色々と掲げられている通りである。形は2型あり、一つは、古代フランス語から借用された *defens* であり、もう一つは、同じく古代フランス語から借用された *defense* である。両者は、それぞれラテン語 *defendo* の完了分詞中性形 *defensum* と女性形 *defensa* からきている（形容詞が名詞化されるのは、ラテン語では、ごく普通のことである）。そして英語においては、早くから語末の *-e* は発音されなくなり、また文法上の性も失われたために、両形が当然のことながら混同されてしまった、ということである。*defence* の綴りは、*defens* から来ている、としている。もう一つ釈然としない説明である。要するに、*council*、*counsel* の項でも述べた通り、*C* と *S* は混同されやすいということである。*offence* と *offense* についても同様のことが言える。

sober と inebriety について

妙な組合せのように見えるが、実は、語源を同じくしたものを持っているのである。*sober* は古代フランス語 *sobre* からの借用である。ラテン語 *sobrius* に遡る。*sobrius* の意味は「酔いから離れて」(*se+ebrius*)、「しらふの」という意味である。母音が *e* から *o* に変わるのは、英語の *solve* がラテン語において **se-luo* から *solvo* になることを考え合わせればよい。名詞は *sobriety*。一方、*inebriety* はラテン語 *inebrietas* からで、意味は「酔い込ませる」(*in+ebrius*) である。接頭辞の付いていない *ebriety* という単語も英語にはあるが、接頭辞の付いた *inebriety* の方が、やはり接頭辞のないものより表現が強くなるのである。そして現代では *ebriety* は、あまり使われないようである。

例文は少々長くなるが、J. Galsworthy: *The Apple Tree* より掲げる。

There could be no garden of his choosing, of “the Apple-tree, the singing, and the gold,” in the words of that lovely Greek chorus, no achievable elysium in life, or lasting haven of happiness for any man with a sense of beauty—nothing which could compare with the captured loveliness in a work of art, set down for ever, so that to look on it or read was always to have the same precious sense of exaltation and restful *inebriety*.

ここでは「酩酊」ではなく「陶醉」という精神的な意味で使われている。

pollution について

pollution の動詞形は pollute である。ラテン語 polluo の完了分詞形 pollutus からきている。polluo は *por-luo にわけられる。後の l に r 音が同化して por が pol になった。そうして por は pro から来ている (pol ← por ← pro ということになる)。pro から por への音の反転は、現代フランス語の pour に見かけられる。pour の元の形は por である。luo は lutum (泥) と語源を同じくして、意味は「よごす」である。

pro が por になる例は、protendo と portendo にある。意味は少々打ち違えている。protendo は文字通りに「前にのぼす」(pro-tendo) であり、portendo は「前に示す・言う」(予示・予言する) と言った具合である。英語には portend, portent が借用されている。それぞれ現在形と完了分詞形からである。

同様な単語に dilute があるが、これは pollute とは語源が違っているのである。dilute はラテン語 di-luo からきている。luo の意味は「洗う」である。従って、diluo の意味は「洗い去る・流す」、「薄める」である。

ingenious と ingenuous について

ingenious はフランス語 ingénieux から借用とも、またラテン語 ingeniosus から借用とも言われる。ingenuous の方はラテン語 ingenuus からの借用である。ingeniosus も ingenuus も語源は in+geno からできており、語尾だけに、名詞 (ingenium) から形容詞を作る -osus と動詞から形容詞を作る -uus が付いているだけである。よく使われる gigno (生む) は geno の重複形 (reduplicated form) である。ingeniosus の原義は「生まれた時から持っている」、「天賦の」であり、そこから「才能のすぐれた」となった。ingenuus の方は「生まれつきの」、「自由の身に生まれた」であり、それから自由民にふさわしい資質や態度に意味が及び、「気品のある」、「礼儀正しい」、「率直な」などの意味が生まれた。語尾 -osus, -uus がどんな意味を持つかは、ここではよく分からない。

さて、英語の ingenious と ingenuous は、綴りも -i- と -u- との違いだけであり、また意味も似ているために、よく混同されるのである。特に OED にもあるように17世紀には誤って用いられた。

6. In 17th c. frequently misused for *ingenious*: see *INGENIOUS* 1-3.
Obs.

1588 SHAKS. *L. L. L.* IV. ii. 80 If their Sonnes be ingennous [*Qo.*

1 ingenious, *Qo.* 2, *Fo.* 3 & 4 ingenuous], they shall want no instruction. *Ibid.* I. ii. 29. 1611 — *Cymb.* IV. ii. 186 My ingenious Instrument, (Hearke Polidore) it sounds. 1653 HOLCROFT *Procopius, Vandal Wars* I. 15 John the Cappadocian, a bad man, was ingenious to find projects for money to the treasury, with the ruine of men. 1663 HEGG *Leg. St. Cuthbert* 42 The art [of illumination of MSS.], I confess, is both ingenious, and commendable. 1795 *Fate of Sedley* II. 151 A sterile effort of folly and of ingenious cunning.

例文にもあるように Shakespeare も誤用している。いなむしろこれが普通であったのかも知れない。OED の Ingenious の項は、わざわざ正用と誤用と二つの項目を設けている。これで誤用がどれほど一般的であったかがよく分かる。副詞 ingeniously, ingenuously, 名詞 ingeniousness, ingenuousness においても同じ誤用が起こっている。ただ、名詞形 ingenuity と ingenuity においては、ingenuity の方にほとんどの意味が吸収されている。我々も間違えるし、彼等も間違えていたのであった。

anxious について

人が将来に対して抱く感情は、期待と不安である。それらに対して、人が胸塞がれ、また胸焦がれる気持ちを表現するのが、この anxious である。anxious はラテン語 *anxius* からの借用である。名詞形 *anxiety* は、フランス語 *anxiété* からの借用とも、あるいはラテン語 *anxietas* からの借用とも言われ、一つに決めがたい。形容詞 *anxius* は動詞 *ango* から来ている。意味は「狭める」、「締めつける」である。これからやって来ようとしている事柄に対して、胸が締めつけられる思いを示す動詞が *ango* である。ただ、ラテン語の *anxius* は、そんな不安と焦燥（焦慮）に駆られる思いのうち、不安な気持ちだけを表わしている。不安な気持ちと併せて焦慮から切望へと変わっていく気持ち、両方を表わすようになるのは、*anxius* が英語に借用されてからである。しかも、下に掲げる OED の引用文からも分かるように、初出は1742年になってからであり、比較的新しいのである。

3. Full of desire and endeavour; solicitous; earnestly desirous (*to effect* some purpose).

1742 R. BLAIR *Grave* 94 The gentle heart, anxious to please. 1794

NELSON in Nicolas *Disp.* I. 434 The General seems as anxious as any of us to expedite the fall of the place. 1843 CARLYLE *Past & Pr.* (1858) 171 Anxious no longer to be dumb. 1860 TYNDALL *Glac.* I. § 13. 93, I was anxious to see many parts of it once more.

anxietas も「切望」の意味を獲得するのは、英語に借用されてからである（初出例は1769年）。

scent と sense について

scent はアングロ・フレンチ (Anglo-French) sentir の動詞的名詞 (verbal noun) sent からの借用と言われ、語源はラテン語 sentio「感じる」である。scent は、もとは狩猟用語であり、猟犬が「においを感じる」、「においをかぐ」ことを言った。a dog of good scent (鼻のよくきく犬) と言ったりするように動物、特に犬の嗅覚を言ったのであった。それから、猟犬の追う動物の残した「におい」となった。

さて scent の中に入ってきた語源にはない-c-であるが、これは、OED Scent *v.*の語形欄とその説明によれば、17世紀以降になって現われたと言うことである（語形欄 7-scent）。その後、語源通りの綴り sent も試みられたようであるが、定着はみなかった。

Scent (sent), *v.* Forms: 5-7 (9 rare) sent, 6-7 sente, (7 cent), 7-scent. [ME. *sent*, a. F. *sentir* to feel, perceive, spec. to smell; = Pr., Sp., Pg. *sentir*, It. *sentire*: -L. *sentīre* to feel, perceive.

The spelling *scent* (for this and the sb.) does not occur in our material until the 17th c. A revival of the etymological spelling *sent* was attempted by A. and J.C. Hare (*Guesses at Truth*, ed. 1838).]

scent の意味は、ラテン語 sentio のフランス語を經由して生まれた特殊な意味であった。

ラテン語の正統的な意味を受け継ぐのは sense の方である。

sense はフランス語 sens からの借用で、語源はラテン語 sensus である。sensus は sentio の完了分詞 sensus からきている。scent の方は現在形からきていることになる。sensus の原義は「感じること」、「感覚」である。そこから多岐にわたる意味が生じてきている。意味の分類の仕方は、Cassell's New Latin

Dictionary の(1)身体的、(2)感情的、(3)理知的の三つに別けた分類がよく要を得ているように思う。

sensus -ūs, m. (sentio), *sense*.

(1) physically; *sensation, feeling by the senses*; plur., *the senses*: voluptatis sensum capere, Cic.; sensus videndi, audiendi, Cic.; moriendi, *the sensation*, Cic.; so often in Lucr.

(2) emotionally: **a**, *feeling*: amoris, amandi, diligendi, Cic.: **b**, *way of feeling, attitude*; esp.: communis sensus, *common humanity, fellow-feeling*, Cic., Hor., etc.

(3) intellectually: **a**, *judgment, perception, understanding*: misero quod omnes eripit sensūs mihi, Cat.; Cic., Verg.: **b**, *way of thinking, attitude of mind*: Cic.: **c**, *the sense, meaning of words, etc.*: verbi, Ov.; testamenti, Hor.: **d**, *concr., a sentence*: Quint., Tac.

このように微妙に変化していく意味の余す所のない分類は非常に難しいものがある。英語の *sense* の意味の分類にも全体として通用するように思う。ただ(3) **d**, *concr., a sentence* は、英語では OED *Sense, sb.*, III, 26 を考え合わせればよい。

revere, reverent, reverend について

それぞれフランス語 *révéler*, 古代フランス語 *reverent, reverend* からの借用である。語源はラテン語に遡る。revere の語源は *revereor* 「尊敬する」である。reverent は *revereor* の現在分詞 *reverens, -entis* から来ており、reverend は同じく動形容詞 (*gerundivum*) *reverendus* から来ている。動形容詞は、受動的な意味を持つ。従って、*reverendus* の意味は、「尊敬されるべき」、「尊敬されるにふさわしい」である。それ故、reverend の方が聖職者に対する敬称として用いられる。

ここで OED からの引用を掲げたい。

1. = REVEREND *a.*, in various uses. Now *rare*. (Very common in 16-17th cent.)

c1380 WYCLIF *Sel. Wks.* II. 229 Þat þe pope wole be clepid 'moost hooly fadir' here, and bishop 'moost reverent' man! c1400 MAUNDEV.

Trav. (1839) xxi. 230 In alle the remenant of the World, ne myghte a man fynde a more reverent man, ne highere in worschipe. c1447 *Shillingford's Lett.* (Camden) 133 The suyt of the reverent fader in God Edmond Bysshop of Excestre. 1533 MORE *Apol.* 81 b, The sacred prynces and prestes. Agaynste any of whyche two reuerent orders [etc.]. 1584 *Mirr. Mag.* 36 Reuerent personages were in danger of dishonour, and innocentes in hazarde of death. 1615 G. SANDYS *Trav.* 216 This once famous Tyrus is now no other then an heape of ruines, yet haue they a reuerent respect. 1662 COKAINE *Ovid* III. ii, The more the merrier, my reverent Mo[ther]. 1796 MOSER *Hermit of Caucasus* I. 98 No harm is intended to the reverent sage of the mountain. 1860 WARTER *Seaboard* II. 443 Preach as did John Wesley at Winchelsea beneath some reverent tree.

16-17世紀には両語 (reverent, reverend) の混同はごく普通の事としている。確かに形態上からも混乱しやすいことは事実であろうが、およそ文を物するほどの人なら reverent の -t はラテン語の現在分詞の t であり、従って能動的な意味を示し、reverend の -d は動形容詞の d であり、受動的な意味を表わすことくらいは十二分に承知しているはずである。

それでは、どうしてこのような混同が起こるのであるだろうか。それは恐らく「主観の相違」とでもいうものではなかろうか。見る者、感ずる者の対象に向かう心持ち (対象の捉え方) が違うのである。同じ対象を主体的、積極的に捉えることもあれば、また逆に受動的にして客観性を持たせることもある。「尊敬する」、「尊敬されるべき」は、物の表裏のようなものであろう。これらの引用例を通読してみて、少し疑問を感ずる所もある。つまり reverent を字義通り能動的に解してもよいのではないか、と思われる文もあるように思う。

succeed, success, succession について

succeed は古代フランス語 succeder, success はラテン語 successus, succession は古代フランス語 succession からの借用である。語源はラテン語起源である。

Cassell's New Latin Dictionary の succedo の意義の説明が単純明解で、一番分かり易いように思えるので掲げたい。

succēdo -cēdere -cessi -cessum (sub/cedo).

(1) *to go under*; usually with dat. LIT., tecto, Cic.; tumulo terrae, Verg. TRANSF., *to come under, submit to*: sub acumen stili, Cic.; oneri, Verg.

(2) *to go from under, ascend, mount*. LIT., sub montem, Caes.; ad castra, sub vallum, in arduum, Liv.; with dat.: moenibus, Liv.; Verg. TRANSF., ad summum honorem, Lucr.; Verg.

(3) *to come after or into the place of; to succeed, relieve*. LIT., of physical movement: in stationem, Caes.; in pugnam, Liv.; with dat.: ut integri et recentes defatigatis succederent, Caes. Of proximity, *to come next*: ad alteram partem succedunt Ubii, Caes. TRANSF., **a**, *to follow, succeed* in an office, etc.: in Pompei locum heres, Cic.; in paternas opes, Cic.; Caes., Liv.; with dat.: Cic.: **b**, in time, *to follow, succeed*: Caes., Ov.; with dat.: aetas aetati succedit, Cic.; Liv.: **c**, of things, *to turn out well, prosper, succeed*: hoc bene successit, Ter.; res nulla successerat, Caes. Absol.: succedit, *things go well*, si ex sententia successerit, Cic. L.; with dat.: coeptis succedebat, Liv.; pass.: nolle successum patribus, Liv.

原義を三つに別けている。(1)「下に行く」、(2)「下から行く」、(3)「…の後に来る」、「跡に入る」である。(sub-の用法については前回に説明した。)「成功する」と言う意味は、初めは(3)のCにあるように、beneとか prospere「望み通りに」といった副詞を伴っていた。それが次第に独立して用いられるようになった((3) C Absol.: succedit, things go well)。名詞 successus には形容詞 prosper を添えて用いられた。英語の場合も同様で、succeed well, good success と言った具合に副詞、形容詞を伴って用いられていた。それが次第に固定化されて行き、修飾語なしにでも「成功する」、「成功」を意味するようになった。もとは、物事がうまくゆこうが、ゆくまいが、事が成ろうが、成るまいが、関係のない中性的な使い方であった。従って、succeed badly と言うてみたり、ill (bad) success とも言ったりしていた。名詞形 success, succession の現代の意味は、前者が「成功」、「出世」、後者が「継続」、「継承」である。これも動詞の意味同様、基本的には、ラテン語 (successus, successio) の意味分担を継承している。普通は、英語に借用されると、新しい意義が加わることも多いのであるが、全体としてラテン語の意義をそのまま留めている。珍しいことである。同じような名詞の作り方をするのに proceed, process, procession があるが、こちらの方は、他に proceeding, procedure の名詞があって、意味の分担は中々複雑である。

言葉の意味と意味変化、更にまた意味変化の方向について、幾分なりとも確信を持ちたいと努めてみても、人間性 (human nature) を掴むのに似て、中々把握しがたいものである。それでも、言葉というのは、その語源について無頓着で、理解のない人が感じまた考える程、豊富な意味のニュアンスは持たないように思える。自ずと言葉のニュアンスにも限度があるのである。このニュアンス (nuance) という言葉にしても、日本語では、抽象的で、中々意味深長な言葉に見える。nuance という語は、フランス語の時代になって生まれてきた言葉であって、O. Bloch et W. von Wartburg (*Dictionnaire étymologique de la langue française*) によれば、1380年初出となっている。そして英語には1781年に入ってきている。語源は nuage と同じくラテン語 nubes 「雲」に遡る。もとは、行き交う雲の色合い (濃淡) を指して nuance があると言ったのである。何も最初から抽象語であったわけではない。それこそ雲を掴むような話ではなく、きちんとした具体性があったのである。それから今日のような抽象性を帯びた意味へと発展していった。そうは言っても、言葉の意味や意味変化には、人間性の持つ多面性や豊饒さが投影されて、簡単な論理では押し進めぬ多様性が随所に示される。言葉の意味の把握には、やはり慎重さと周到さが要求されるものである。

参考書目

Bloch, Oscar et Walther von Wartburg: *Dictionnaire étymologique de la langue française*, Presses Universitaires de France

Chantraine, Pierre: *Dictionnaire étymologique de la langue grecque Histoire des mots*, Klincksieck

Ernout, Alfred et Antoine Meillet: *Dictionnaire étymologique de la langue latine Histoire des mots*, Klincksieck

Glare, P. G. W.: *Oxford Latin Dictionary*, Clarendon Press

Kurath, Hans, S. M. Kuhn and John Reidy: *Middle English Dictionary*, University of Michigan Press

Lewis, C. T. and Charles Short: *A Latin Dictionary*, Clarendon Press

Murray, J. A. H., Henry Bradley, W. A. Craigie and C. T. Onions: *The Oxford English Dictionary*, Clarendon Press

Simpson, D. P.: *Cassell's New Latin Dictionary*, Cassell

エミール・バンヴェニスト著 前田耕作監修「インド＝ヨーロッパ諸制度語彙集」言叢社

寺澤芳雄編集「英語語源辞典」研究社